

原 著

養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究 — 1歳6ヶ月健診用気質質問紙とCBCLの関係 —

武井祐子*¹ 寺崎正治*¹

要 約

子どもの気質と問題行動との関連を検討することは、将来の子どもの問題行動の予測や母親が育児において感じるであろう困難や不安を理解していくことを可能にすると考えられる。そこで本研究は、子どもの気質と幼児の問題行動との関連を調べることで、健診などの相談現場で気質質問紙を使用する意義について検討した。1歳6ヶ月健診を受診する幼児をもつ養育者500名を対象に、武井他(2004)が作成した1歳6ヶ月健診用気質質問紙と問題行動チェックリスト(CBCL)を実施した。302名の回答を分析した結果、以下の点が明らかになった。(1)否定的感情反応の高さや生理リズムの不規則さは、幼児の様々な問題行動と関連していた。このような問題行動から生じる母親の育児困難感や不安、さらに否定的な育児態度を予測できるのではないかと考えられた。(2)神経質な気質は、人や状況への適応性のよさを示す可能性が示唆された。(3)気質尺度の注意の転導性が示す内容とCBCLの注意・集中尺度で測定される内容とは異なった。(4)自閉性障害のような発達障害を疑う場合は、否定的感情反応尺度や神経質尺度に注目することが重要でないかと考えられた。以上のことから、1歳6ヶ月健診用気質質問紙は相談現場で養育者をサポートしていくために有意義な情報を提供できる質問紙だと考えられた。

緒 言

昨今、児童期や青年期の不適応問題が深刻化してきている。そのなかには、周囲の大人が子どもの状態の理解を誤り、間違った対応をすることで引き起こされた不適応問題も含まれている。このようなケースでは、周囲の大人が子どもの状態を客観的に把握し、適切な対応をすることで不適応問題を防げたと考えられる。子どもに対する正しい理解と対応は、単に不適応問題を予防するだけでなく、子どもの健全な発達を保證すると考えられる。

注意欠陥による問題行動、攻撃的行動、反社会的な問題行動は、その起源を発達早期に遡ることができ、子どもの成長とともに“発達し”、後の発達段階で様々な不適応につながっていくとの指摘がある(菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井,1999)¹⁾。よって、そのような問題を予防するためには、実際に不適応行動が生じている児童期や青年期に限らず、乳幼児期を視点にいれる必要がある。日本では、予防という視点から、昭和36年より乳幼児健康診査が実施され、子どもの発達上や行動上の問題を初めて相

談する場として利用されてきた。最近では、発達が遅れているというだけでなく、落ち着きがない、こだわりがある、人との関わりが持ちにくいなどの軽度発達障害にみられる問題行動の相談や、養育者自身の育児不安や育児ストレス、子どもへの関わり方などについての相談が増加し、虐待などの深刻な問題も把握されるようになってきている。そのため、健康診査の場合は、子どもの状態を適切に把握して対応するだけでなく、養育者のリスクを早期発見、早期介入し、養育者に対して育児支援を行う必要がある(松石,2002)²⁾。育児支援を行う際、問題に至った原因を養育者側や子ども側だけに求めるのではなく、養育者と子どもの関係性の中で考えることが重要であり、その際、子どもの気質が重要な要因であることが指摘されている(上村,1989)³⁾。子どもの気質をとらえることは、関係性の理解だけでなく、子どもの問題行動をはじめとする臨床的な諸問題を理解することも可能とし(庄司,1999)⁴⁾、相談現場で把握すべき要因の1つと考えられる。

気質とは、生得的、体質的な基盤をもつ、個人の行動特徴であり、ある程度の時を越え、一貫性をもつ

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先)武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

と考えられている。子どもの気質に関する研究は、情動性、活動性、社会性を気質の基本特性としてとらえて EAS を開発した Buss & Plomin (1984)⁵⁾ の研究、気質を反応性と自己制御といった大脳神経系システムに関する特性でとらえ、IBQ を開発した Rothbart (1981)⁶⁾ の研究などがみられるが、中でも、Thomas & Chess (1963 など)⁷⁾ の研究は、子どもの気質研究に大きな影響を与えている。彼らは、140人余りの乳児とその親に面接を縦断的に実施し、子どもの行動特徴について分析するニューヨーク縦断研究 (New York Longitudinal Study) を 1956 年に開始した。その研究結果から、乳児期初期から子どもの反応には個人差がみられ、特にその個人差は活動水準、周期性、接近性、順応性、敏感性、反応強度、気分の質、気の散りやすさ、注意の範囲と持続性という 9 つの行動特徴において顕著であり、さらにこれらの尺度のパターンで、子どもを、「扱いにくい」子ども、「扱いやすい」子ども、「時間のかかる」子どもといった気質診断類型に分類できるとしている。後に Carey らによってこれらの行動特徴を測定する質問紙が開発され (Carey, 1972)⁸⁾、日本では、佐藤 (1985, 1988 など)^{9,10)} や庄司 (1984 など)¹¹⁾ らのグループが、Carey らの気質質問紙 (ITQ, TTS, BSQ など) の翻訳、標準化を行っている。しかし、日本で使用されているこれらの質問紙は、アメリカからそのまま導入されたために日本の文化に適さない項目が含まれていることや短時間で問題を把握する必要がある健康診査などの相談現場で使用するには項目数が多いこと (佐藤, 1985)⁹⁾、また尺度自体の安定性がないこと (菅原・青木・北村・島, 1988; 栗山, 2000)^{2,13)} など、問題点が指摘されている。このことから、武井・笹川・門田・大谷・水子・寺崎・金光 (2004)⁴⁾ は、健康診査で使用可能な 6 尺度 47 項目の 1 歳 6 ヶ月健診用気質質問紙を作成し、標準化の作業を行っている。

Thomas, A. & Chess, S. がとりあげた行動特徴のうち、“順応性”や“注意の範囲と持続性”(麻原・村嶋, 飯田, 1992)¹⁵⁾、“接近性”や“気分の質”(Tassel, 1984)¹⁶⁾ は、子ども自身の発達の遅れの有無と関係がみられることが指摘されている。また、菅原・北村・戸田・島・佐藤・向井 (1999)¹⁾ らは、Carey の質問紙の項目を因子分析して得られた“注意の集中性”と“規則性”、“反応強度”と後の問題行動の有無との間に関係がみられると報告している。さらに、周期性、応答性が低く、子どもを扱いにくい気質をとらえた母親は、育児における負担感や不安が強く、育児にネガティブなイメージを強くもつこと (上村・田島, 1988)¹⁷⁾、扱いにくい気質と育児ス

トレスとの関連が強いこと (水野, 1998)¹⁸⁾ など指摘されている。以上のように発達の遅れの有無、後の問題行動の有無、母親自身の育児不安やストレスと子どもの気質との関係が指摘されているが、中でも子どもの問題行動は、相談現場でとりあげられることも多く、母親の育児不安や育児ストレスに関わる問題と考えられる。したがって、子どもの気質と問題行動がどのように関連するのかを明らかにすることが、将来の子どもの問題行動の予測や母親が育児において感じるであろう困難や不安を理解していくことを可能にするのではないかと考えられる。

そこで、本研究は、1 歳 6 ヶ月健診用気質質問紙の尺度と幼児の問題行動、さらに軽度発達障害にみられる特徴との関連を明らかにし、相談現場で気質質問紙を使用する際の尺度の意義を検討することを目的とする。なお、本研究は、1 歳 6 ヶ月健康診査用気質質問紙作成を目的として、1,550 名 (有効数 1,345 名) を対象に実施した研究の一部である。

方 法

1. 質問紙

1.1. 気質質問紙

否定的感情反応、神経質、順応性、外向性、規則性、注意の転導性の 6 尺度 47 項目から成る質問紙 (武井・笹川・門田・大谷・水子・寺崎・金光, 2004)⁴⁾ を使用した。回答は、「全くない」から「いつもある」の 4 段階の頻度評定とした。

1.2. Child Behavior Checklist (以下, CBCL)

多様な問題行動を呈する子どもの一般的臨床的評価手段として Achenbach & Edelbrock によって開発された尺度であり、年齢に応じて 3 種類に分かれている。2~3 歳用は発達状況や種々の習癖、心理的・身体的症状に関する項目から成っている。日本では 1980 年以降より注目されるようになり、日本語版の作成が進められている (中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡, 1999a)¹⁹⁾。今回用いた質問紙は、反抗尺度、引きこもり尺度、攻撃尺度、分離不安尺度、不安神経質尺度、発達尺度、睡眠・食事尺度、注意集中尺度の 8 尺度について、中田・上林・福井・藤井・北・岡田・森岡 (1999b)²⁰⁾ の因子分析の結果より因子負荷量が低い項目を省き、さらに年齢的に適当でないと考えられる内容の項目、類似した内容の項目を省いた 8 尺度 27 項目の質問紙である。回答は、「当てはまらない」「時々当てはまる」「当てはまる」の 3 段階評定とした。

2. 対象者

1 歳 6 ヶ月健康診査対象者 500 名の保護者である。うち、質問紙回収数は 302 (回収率 60.4%) であっ

表1 全体 (CBCL 実施群を除く) と CBCL 実施群の各尺度の t 検定の結果

気質尺度 (項目数)		否定的感情 反応 (9)	神経質 (10)	順応性 (6)	外向性 (8)	規則性 (7)	注意の転導 性 (7)
全体 (n=1093)	平均	21.73	22.93	15.51	26.51	21.92	22.56
	標準偏差	4.63	4.15	3.78	3.08	3.41	2.59
CBCL実施群 (n=252)	平均	21.70	23.16	16.03	25.88	21.60	22.24
	標準偏差	4.40	4.13	3.76	3.20	3.34	2.69
t値		-0.08	0.79	1.97*	-2.92**	-1.35	-1.73+

** p<.01 * p<.05 + p<.10

注) 順応性尺度は得点が高いほど、順応性が低いことを示す。

た。回答者は99%が母親であった。子どもの年齢は17ヶ月~21ヶ月で、18ヶ月が63%で最も多く、17ヶ月~19ヶ月を合計すると98%であった。性別は男児53%、女児47%であった。質問紙項目への回答が1項目でも欠損の場合は分析対象より除外したため、有効数は252であった。

3. 手続き

健診時に使用する問診票とともに、健診受診約1ヶ月前に郵送し、健診会場で回収した。

結 果

1. 気質質問紙について

本研究の標本は、気質質問紙作成の際の標本 1,550名 (有効数 1,345名) の一部である。そこで、本研究で用いた標本に偏りがなにかみため、今回の標本を除いた全体の標本における各尺度の平均と比較した。結果、全体群と比較して、CBCL 実施群の得点が、外向性尺度で有意に低く ($t(1343) = -2.92, p < .01$)、順応性尺度で有意に得点が高かった ($t(1343) = 1.97, p < .05$)。

2. 気質質問紙と CBCL の関係について

気質質問紙の各尺度と CBCL の各尺度との間の相関は、表 2 のとおりである。気質質問紙の否定的感情反応尺度は、CBCL の尺度との間に有意な正の相関が認められ (攻撃尺度 $r = 0.210, p < .01$; 睡眠・食事尺度 $r = 0.215, p < .01$; 注意集中尺度 $r = 0.338, p < .01$; 発達尺度 $r = 0.183, p < .01$; 反抗尺度 $r = 0.659, p < .01$; 引きこもり尺度 $r = 0.202, p < .01$; 不安神経質尺度 $r = 0.320, p < .01$; 分離不安尺度 $r = 0.271, p < .01$)、否定的感情反応が高いほど、様々な問題行動を呈しやすいと考えられる。とくに「癩癩を起こす」「よくすねる」「頑固である」などが含まれる反抗尺度と最も高い相関がみられた ($r = 0.659, p < .01$)。神経質尺度は、CBCL の 6 尺度と有意な負の相関を示し (攻撃尺度 $r = -0.291, p < .01$; 睡眠・食事尺度 $r = -0.256, p < .01$; 注意集中尺度 $r = -0.333, p < .01$; 発達尺度 $r = -0.187$

$p < .01$; 反抗尺度 $r = -0.286, p < .01$; 引きこもり尺度 $r = -0.124, p < .01$)、几帳面さや敏感さ、聞き分けのよさを示す神経質傾向が高いほど、問題行動が少ない傾向が認められた。順応性尺度 (得点が高いほど順応性が低いことを意味する) は CBCL の 4 尺度と有意な正の相関が認められた (反抗尺度 $r = 0.220, p < .01$; 引きこもり尺度 $r = 0.172, p < .01$; 不安神経質尺度 $r = 0.230, p < .01$; 分離不安尺度 $r = 0.452, p < .01$)。新しい環境や見知らぬ人への順応性が低いほど、問題行動が多いと考えられた。外向性尺度は CBCL の 4 尺度と有意な負の相関、傾向が認められ (発達尺度 $r = -0.145, p < .05$; 引きこもり尺度 $r = -0.199, p < .01$; 不安神経質尺度 $r = -0.109, p < .10$; 分離不安尺度 $r = -0.132, p < .05$)、注意・集中尺度と有意な正の相関が認められた (注意集中尺度 $r = 0.227, p < .01$)。外向的であるほど、引きこもりや不安傾向は低くなるが、注意・集中に問題がみられると考えられた。規則性尺度は CBCL の 6 尺度と有意な負の相関が認められ (睡眠・食事尺度 $r = -0.510, p < .01$; 注意集中尺度 $r = -0.222, p < .01$; 反抗尺度 $r = -0.335, p < .01$; 引きこもり尺度 $r = -0.157, p < .05$; 不安神経質尺度 $r = -0.126, p < .05$; 分離不安尺度 $r = -0.145, p < .05$)、規則的であるほど問題行動が少ないと考えられた。注意の転導性尺度は CBCL の引きこもり尺度と有意な負の相関が認められ (引きこもり尺度 $r = -0.217, p < .01$)、注意の切り替えが早いほど、引きこもりという問題行動につながらないと考えられた。

考 察

本研究の標本は、気質質問紙作成のデータを得るために行われた他の標本と比較したところ、2つの気質尺度得点において差が認められた。すなわち、本研究の対象者は他の対象者に比べ、順応性と外向性において低い傾向にあり、やや偏った特性を有していた。このような偏りが生じた理由は不明であるが、気質質問紙の尺度と CBCL の尺度との相関を

表2 CBCLの各尺度と気質質問紙の各尺度との相関表

CBCL尺度 (項目数)	攻撃 (3)	睡眠・食事 (2)	注意集中 (3)	発達 (1)	反抗 (7)	引きこもり (5)	不安神経質 (3)	分離不安 (3)
否定的感情反応 (9)	0.210**	0.215**	0.338**	0.183**	0.659**	0.202**	0.320**	0.271**
神経質 (10)	-0.291**	-0.256**	-0.333**	-0.187**	-0.286**	-0.124*		
順応性 (6)					0.220**	0.172**	0.230**	0.452**
外向性 (8)			0.227**	-0.145*		-0.199**	-0.109+	-0.132*
規則性 (7)		-0.510**	-0.222**		-0.335**	-0.157*	-0.126*	-0.145*
注意の転導性 (7)						-0.217**		

** p<.01 * p<.05 + p<.10

分析する際には格別大きな問題にはならないと考えられる。

気質と問題行動との関連については、気質質問紙の各尺度と、CBCLで把握できる問題行動との間に一定の関係が見いだされた。「思い通りにならないと激しく感情を表す」「よくさわいで大泣きする」などの内容を含む否定的感情反応尺度得点が高いほど、様々な問題行動が生じやすく、なかでも「癩癩を起こす」「頑固である」に代表される反抗的な面との関連が強かった。否定的感情反応は、否定的な育児態度(中山, 2003)²¹⁾や育児不安(堀, 2003)²²⁾、母性意識の低さ(野田, 2003)²³⁾とも関連すると報告されている。否定的感情反応は、幼児の様々な問題行動の危険因子であり、おそらくそこから生じる母親の育児困難感や不安、それによって引き起こされる否定的な育児態度を予測できるのではないかと考えられた。神経質尺度と問題行動との関係については、神経質な傾向が高いほど、問題行動が少ない傾向が見いだされた。神経質尺度は、内容的には「同じ失敗を繰り返さない」「物を整えたり、きれいにしたりすることにこだわる」といった几帳面さや敏感さ、聞き分けのよさを示す項目から成り立っている。これらのことから、神経質な気質は、人や状況への適応性のよさを示す可能性が示唆された。順応性尺度は分離不安や不安傾向を示す問題行動と関連がみられた。順応性尺度は新しい状況や知らない人への慣れにくさを示す項目から成っている。このような気質が、不安が高く内向的で、親しい人となかなか離れられないといった非社会的な問題行動と関連が強いと考えられた。気質尺度の外向性尺度と問題行動との関係では、外向的であるほど引きこもりや不安傾向など非社会的な問題行動が少ない傾向、集中できなかつたり、落ち着きがないといった、注意集中の欠如といった問題行動が多い傾向が見いだされた。外向性尺度には「座って遊ぶよりも、走ったり、飛び跳ねたりする遊びの方を好む」初めて

の場所を探索している時、活発に動き回る」といった、気の散りやすさや活動の多さを表している内容が含まれている。よって、集中力の問題との関係が強くなったと考えられる。規則性尺度と問題行動との関係からは、規則的なリズムであるほど、様々な問題行動がみられないという結果が得られた。とくに規則的であるほど、睡眠・食事尺度の得点が低くなっていた。つまり規則的であるほど、寝付きの悪さや食事面の問題が生じにくいと考えられた。菅原ら(1999)¹⁾は規則性と問題行動の関係、上村・田島(1988)⁷⁾は規則性と育児不安やストレスとの関係を見いだしている。今回の結果を合わせて考えると、規則性尺度によって、子どもの現在および後の問題行動の予測や養育者の育児困難感や不安感を理解していくことが可能になると考えられた。注意の転導性尺度と問題行動の間には、引きこもり尺度をのぞいて関連がみられなかった。CBCLの注意・集中尺度との間に関連はみられなかったことから、気質尺度の注意の転導性尺度で測定される内容とCBCLの注意・集中尺度で測定される内容は異なると考えられた。つまり、気質尺度の示す内容は、注意・集中の欠如の意味ではなく、注意の切り替えが早く、1つのことにこだわらずに状況に対応していくことと関連していると考えられ、その結果、1つのことにこだわり、周囲に関心を向けにくいといったような引きこもり行動が生じにくくなるものと考えられた。

Thomasらの気質類型の「扱いにくい」気質タイプは、養育者の育児不安、育児ストレスと関連があるとされている(上村・田島, 1988; 水野, 1998)^{7, 18)}。「扱いにくい」気質タイプを分類する際に基準となる特徴は、周期性、接近性、順応性、反応強度、気分の質の5つの特徴である。本研究においても、特に否定的感情反応尺度、順応性尺度、規則性尺度は反抗的な問題行動、分離不安、不安が高いといった問題行動と関連することが示された。このような問題

行動が養育者の育児不安や育児ストレスを引き起こす可能性が示唆された。

坂野・佐藤・佐々木・久保・坂爪・土肥・市井(1995)²⁴⁾は、自閉性障害の診断を受けた幼児・児童と健常な幼児・児童について、CBCLの尺度得点の差異を検討した結果、自閉性障害児では注意集中尺度と発達尺度の得点が健常児に比べ高くなることを示している。今回の結果では、これら2つの尺度得点が高いほど、気質尺度の中で、否定的感情反応尺度得点が高くなり、神経質尺度得点が低くなる傾向が認められた。よって自閉性障害のような発達障害を疑う場合は、否定的感情反応尺度や神経質尺度にまず注目することが重要ではないかと考えられた。

以上、1歳6ヶ月健康診査用気質質問紙の各尺度と幼児の問題行動との関連を調べたところ、各気質尺度と問題行動との間に一定の関連性があることが明らかになった。また、自閉性障害などの軽度発達障害を疑う場合に注目すべき尺度が明らかになった。

今後は育児不安や育児ストレスとの関係を詳しくみることで、気質尺度を通じて養育者をどのようにサポートしていけるか、具体的に検討していきたいと考えている。

本研究は、平成15年度文部科学省科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部である。

文 献

- 1) 菅原ますみ,北村俊則,戸田まり,島 悟,佐藤達哉,向井隆代:子どもの問題行動の発達: Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から. 発達心理学研究, 10(1), 32-45, 1999.
- 2) 松石豊次郎: 乳幼児健診の意義とその必要性について. 小児保健研究, 61(2), 247-250, 2002.
- 3) 上村佳代子: 子どもの気質と母子関係. 小児看護, 12(4), 465-469, 1989.
- 4) 庄司順一: 子どもの気質と発達について. 気質概念とその小児科臨床への適用, 小児科, 40(8), 995-1000, 1999.
- 5) Buss AH and Plomin R: The EAS approach to temperament Temperament: early developing personality traits. Lawnsence Erlbaum Associates, News Jersey, 67-79, 1984.
- 6) Rothbart MK: Measurement of temperament in infancy. *Child Development*, 52, 569-578, 1981.
- 7) Thomas A, Chess S, Birch HG, Hertzog ME and Korn S: Behavioral individuality in early childhood. New York University Press, New York, 1963.
- 8) Carey WB: Clinical applications of infant temperament measurements. *The Journal of Pediatrics*, 81, 823-828, 1972.
- 9) 佐藤俊昭: 子どもの気質の追跡研究 — 序報 —. 東北大学教養部紀要, 43, 171(1)-151(21), 1985.
- 10) 佐藤俊昭: 子どもの気質の追跡研究: 第2報・日本語版 ITQ-R とその使用経験. 東北大学教養部紀要, 196-175, 1988.
- 11) 副田敦裕, 横井茂夫, 庄司順一: 乳児の気質と発達に関する研究 — 1~2ヶ月児について — 1) 1~2ヶ月児用行動様式質問紙の標準化. 慈恵医大誌, 99, 709-715, 1984.
- 12) 菅原ますみ, 青木まり, 北村俊則, 島 悟: 乳児期における気質の特徴の構造 — 日本語版 Revised Infant Temperament Questionnaire の検討 —. 湘北紀要, 9, 157-163, 1988.
- 13) 栗山容子: 乳幼児の気質構造の分析. 小児保健研究, 59(3), 417-423, 2000.
- 14) 武井祐子, 笹川美奈子, 門田昌子, 大谷美幾, 水子学, 寺崎正治, 金光義弘: 養育者がとらえる幼児の行動様式に関する研究 II- 1歳6ヶ月健診用気質質問紙作成の試み, 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1021, 2004.
- 15) 浅原きよみ, 村嶋幸代, 飯田澄美子: 幼児の気質と発達に関する研究(第2報) 発達の遅れと気質の関連性. 日本公衛誌, 39(11), 839-846, 1992.
- 16) Tassel EV: Temperment characteristic of mildly developmentally delayed infants. *Developmental and behavioral pediatrics*, 5, 11-14, 1984.
- 17) 上村佳代子, 田島信元: 発達初期の母子関係と子どもの発達(その2): 子どもの気質と母子関係形成の関連. 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 180-181.
- 18) 水野里恵: 乳児期の子ども気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関係: 第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究. 発達心理学研究, 9, 56-65, 1988.
- 19) 中田洋二郎, 上林靖子, 福井知美, 藤井浩子, 北道子, 岡田愛香, 森岡由起子: 幼児の行動チェックリスト(CBCL/2-3)の日本語版作成に関する研究, 小児の精神と神経, 39(4), 305-316, 1999a.
- 20) 中田洋二郎, 上林靖子, 福井知美, 藤井浩子, 北道子, 岡田愛香, 森岡由起子: 幼児の行動チェックリスト(CBCL/2-3)

- の標準化の試み．小児の精神と神経，**39**(4)，317-322，1999b．
- 21) 中山理恵：幼児の気質と親の養育態度との関連．平成15年度卒業論文集，2003．
- 22) 堀寛子：幼児の気質が育児不安に及ぼす影響．平成15年度卒業論文集，2003．
- 23) 野田由紀恵：母親の母性意識に関する一研究 —子どもの気質認知および養育態度への影響—．平成15年度卒業論文集，2003．
- 24) 板野雄二，佐藤健二，佐々木和義，久保義郎，坂爪一幸，土肥夕美子，市井雅哉：—Child Behavior Checklist (CBCL) 日本版による自閉性障害の診断と評価：CBCLの臨床的応用可能性の検討．安田生命社会事業団研究助成論文集，**31**，32-41，1995．

(平成16年10月30日受理)

**A Parent Assessment of Toddler Temperament
— A Study of the Relation Between Temperament Questionnaires for 18 Month
Old Health Examinations and CBCL —**

Yuko TAKEI and Masaharu TERASAKI

(Accepted Oct. 30, 2004)

Key words : temperament, toddler, cbcl, questionnaire

Abstract

We can understand the stress and anxiety parents may have in rearing a child by investigating the relevance of child temperament and problem behavior. The purpose of this study is to discuss the meaning of using the temperament questionnaire at infant health examinations by investigating the relevance of child temperament and problem behavior. 500 parents who had toddlers having health examinations at 18 months answered the temperament questionnaire for the 18 month old health examination and Achenbach's Child Behavior Checklist for Ages 2-3 (CBCL). 302 parents responded to the questionnaire survey. The following results were found: (1) Negative affect reaction and irregular physiology were associated with various problem behaviors and predicted the stress, anxiety and negative attitudes parent may have when rearing their children. (2) Sensitivity may show adaptability to strange or new conditions. (3) What was indicated by changing attention found on the temperament scale was different from what was indicated by attention problems found on the CBCL scale. (4) If we suspect a developmental disorder such as autism, it is important that we pay attention to the negative affect reaction scale and sensitivity scale. Then, temperament questionnaire for 18 month old health examinations was useful to support parents who have stress about rearing children.

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.14, No.2, 2005 261-266)